

## 詩人のコスモロジー

京都教会 牧師 入 治彦

広大な星空を見上げて、古代ギリシャの人々は、星座に色々な名前をつけていったといひます。古代オリエントの人々は、夜空を見上げてそこに神々そのものの存在を感じたといひます。しかし、古代イスラエルの詩人は星空を見上げて「天に輝くあなたの威光をたたえます」と神を賛美して詠いました。

この大宇宙の大きさ、壮大さを思ったにせよ、詩人は、この天空の壮大さは神そのものではなく、神の創造なさったもののごく一部として受け取ったのです。「あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も星もあなたが配置なさったもの」と。人間には量り知れない程、壮大な宇宙、それは神々そのものというのではなく、神の指一本によって創造されたものに過ぎないと詠っています。

であるならば、人間とは神の前には、ほんの小さなちり、芥に過ぎないものではないでしょうか。ヨブ記の言葉を借りるならば「月すらも神の前では輝かず、星も神の眼には清らかではない。まして、人間はうじ虫、人の子らは虫けらに過ぎない」と言っています。

ところが、神はそんなとるに足らない、見過ごしてしまうような人間の顔一つ一つをおぼえ、心に留めていてくださる、と言われるのです。「そのあなたが御心に留めてくださるとは」そればかりか神はそんなちっぽけな卑しい人間を見捨てるところか、「栄光と威光という冠をかぶらせて、この世を治めるように、大切なこの世界全体を託された」と詩人は書き留めています。

ここから言えることは、人間とは一方ではちり、芥、うじ虫のように虚無的な存在であり、一方では王冠をかぶらされてすべてを治めていく存在であるということです。「虚無性」と「王者性」という二重の人生を送ることが求められている存在です。

パスカルは、瞑想録（パンセ）の中で書いています。「無限に比すれば無。無に比すれば一切。無と一切の間。両極端の間を占めるこの状態は、私たちの力にことあるごとにあらわれる」詩編8編は、皆曖昧さを生きる人間が、その中間性に耐えられるのは、ただ神の力とあわれみに生かされていることを知る時だと語っています。

この混沌とした現代、人間という中間性に耐えるべく、神のただ憐れみによって生かされている者、下駄をはかされた者であることをわきまえつつ、この世界への神の祝福の仲介者として責任を全うしていききたいものです。



アダムの創造 (ミケランジェロ)